

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

人間には二つの進化の方法がある。一つは遺伝子で、もう一つが技術である。そもそも人間と動物の違いは、道具や技術を使うかどうかという点にある。道具や技術を使う動物が人間なのである。すなわち、道具や技術を發展させることが人間の進化でもある。携帯電話を使って海外の人と話をする人間は、動物から見れば、テレパシーの使い手であり、超能力者である。すなわち、人間は遺伝子と技術という二つの方法で進化を続けているのである。

そして技術による進化は、遺伝子による進化よりも遥かに速度の速い進化をもたらしている。そのために、人間と動物の間には圧倒的な能力差が生まれ、この世は人間だけに支配される世界になった。

この人間を進化させる技術は、人間の能力をヒントに開発されてきた。人間は新しい道具や技術を開発する際には、必ず自らの能力を参照し、その能力を置き換えたり、その能力をさらに高めたりすることを目的に技術を開発してきた。より遠くに移動するために、車や飛行機を発明し、建物を効率良く建てるために、様々な建築機械を開発した。より多くの人に情報を伝えるために、ラジオやテレビを発明し、誰とでもどこでもいつでも話ができるように電話を発明した。このように、技術は人間の能力を短期間のうちに機械に置換し、その機能を飛躍的に拡張してきた。

このような人間の能力を置換し、拡張する技術開発の歴史において、その技術開発が止まったことは一部の例外を除いてほとんど無い。それには二つの理由がある。

人間は能力を拡張して生き残っていくという遺伝子に刻み込まれた使命にしたがって、その能力を拡張し続けている。そしてその結果生み出される技術は、豊かな経済活動を生み出す。人間の能力を拡張する新しい技術は、この世に生き残るという使命を帯びた人間にとっては非常に魅力的なものであり、それを手に入れ生活を豊かにすることが生きる目的となる。それ故、人類の歴史において、技術が衰退したことはほとんど無いのである。

もう一つの理由は、技術開発そのものが人間理解のプロセスであるということである。より強い力を得て生き残るというだけでは、動物の生き残る目的とそれほど大差はない。人間と動物の違いは、無論、技術を生み出せるかどうかという点にあるのであるが（人間とは、道具や技術を使う動物であり、道具や技術の利用こそ人間と動物の違いがある）、人間が技術を生み出した理由は、その大きな脳にある。

人間の脳は、その大きさと複雑さゆえに、自らを **A** 視し、自らについて考えることができる、他の動物が持たない能力を持つ。

人間を含め動物においては、ほとんどの感覚器が外側に向いており（多くの感覚器は進化の過程で皮膚が変化したものである）、自らを直接観察することができない。しかし、人間のように大きな脳があれば、直接観察できなくとも、脳の中に自らを理解するモデルを、多様な感覚器を通して得られる情報をつなぎ合わせて、作り上げることができる。これが **A** 的に自らや世界を理解するということである。

また、技術とは、人間の能力を置き換えて作られてきたものであるが、この技術そのものもまた人間をモデル化し、理解する直接的な手段となる。言い換えれば、人間の能力を技術に置き換えることは、人間をモデル化することに他ならない。たとえば、生身の手を、ロボット義手に置き換えて、生身の手と同じかそれ以上の機能を得たとするなら、そのロボット義手は人間の手とみなしていいだろう。そして、そのとき同時に、ロボット義手を通して、手をモデリングできたことになる。

技術の歴史は、人間の機能を機械に置き換える歴史であり、そのことを通して我々人間は、「人間とは何か」ということを考えてきた。

技術による人間の機能の置き換えは、人間のモデル化のプロセスでもあるのだが、一方で消去法的に人間を理解する方法でもある。技術によって置き換えられる部分には人間の本質が無いと考える人は多い。そういう人にとっては、人間の機能をほとんど機械に置き換えていつて、最後に残る人間の種を見定めるといって、人間理解を試みているのだと思う。数百年前の社会では、手足が無かったり目が見えない者は、人間社会に参加することが難しかった。普通の人間とはみなされず、差別されてきた。しかし技術が進歩した今日では、手足がなくて義手や義足を使っている人も差別されることはない。普通の人間として人間社会に受け入れられる。すなわち、**B** 。

このような技術は既に加速的な進化を始めている。人間が作り出した技術の中で、最も汎用的で最も強大な力を持つのは、コンピュータであろう。そのコンピュータは年に二倍の速度で性能を向上させ続けている。この年に二倍の速度

でコンピュータが性能を向上させ続けるという法則をムーアの法則という。

このムーアの法則に従ったコンピュータの進化は、コンピュータが爆発的に発展する初期の現象で、そのうちに性能向上は頭打ちになると、多くの研究者が考えていた。しかし、今日に至っても、コンピュータはこのムーアの法則に従って性能を向上させ続けている。

その理由は、コンピュータの設計にコンピュータが使われているからかもしれない。コンピュータそのものの設計に関してはもはや人間が手作業で図面を引いたり、そのために必要な計算やシミュレーションを行うことはできない。全てコンピュータによって行われている。無論、人間によって常に新たな設計のアイデアが組み込まれるわけであるが、その効力とコンピュータの計算能力の向上のどちらかが、新たなコンピュータの設計に大きく貢献しているのだろうか。専門外の私は明確に答えることができないが、コンピュータの計算能力の向上が設計に無視できない影響を与えているのは間違いないだろう。

コンピュータがコンピュータを開発し、ロボットがロボットを開発し、コンピュータやロボットが

C

ことを、シンギュラリティと言わなければならないのであるが、そのシンギュラリティは既に始まっているかもしれない。技術の進化はコンピュータだけでなく、人間の形態を模倣したロボットにも及んできている。人間は人間を理解する脳を持つ。故に、その人間が使いやすい製品を作ろうと思えば、必然的に人間らしい機能を与えることになる。

特にアンドロイド（ヒューマノイドを含む）の研究開発はこの一〇年から一五年の間に飛躍的に進んだ。コンピュータが人間の脳の機能を置き換えるものであるとすると、アンドロイドは、人間の見かけや振る舞いを置き換え、さらには他者との相互作用機能、実社会において、他者と社会的な関係を持つ機能を置き換えるものである。

今のアンドロイドやその他のロボットには、行動はプログラムされているが、意図や欲求はプログラムされていない。故に、対話をしていても、自らの意図とは無関係に、与えられる質問に対して、決められた答えを意味なく返すだけであり、人間らしい対話にはならない。このアンドロイドに行動だけでなく、その行動を生み出す意図や欲求もプログラムすれば、さらに人間らしくなることは間違いない。

そして、それだけではなく、そのような意図や欲求を持つアンドロイドは、対話相手である人間の意図や欲求も理解できると期待される。人間の発話や行動を観察し、それを自らの内部モデルに照らし合わせ、自分ならどのような意図や欲求の下にその行動をとるのかと推定するのである。

人間の意図や欲求を推定できるアンドロイドは、人間の意図や欲求に寄り添うこともできるし、数多くある自らの意図の何割かを、特定の人間と共有することもできる。意図の共有とはなんだろうか。無論それは親密な関係を意味するのであるが、³もしかしたら互いに愛するということは、そういうことかもしれない。

人間の能力がさらに機械で置き換わると共に、ロボットも、より人間らしくなっていく。そうしたロボット社会において、我々人間が学ぶことは、「人間とは何か」という、人間自らの存在を問いかける疑問に対する答えだと思う。

ロボットとの関わりが増える社会においては、その日常において、「心」「意識」「自我」というような、人間にとって重要と皆が信じ、日常的に使われる一方で、意味がほとんど不明な言葉や、その言葉が指示する問題について深く考える機会を与えてくれるということである。

（石黒浩「アンドロイドと人間の未来」による）

問一 傍線部「技術開発そのものが人間理解のプロセスである」とあるが、この説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人間にとって自らを知ることには終わりがないように、人間を知ることによって新たな技術開発にも終わりがなく、ということ。

ロ 技術は人間の能力を次々に置き換えて作られるので、技術の進化は人間にとって自分自身をより広くより深く理解するものになる、ということ。

ハ 新たな人間理解と、それに基づく新たな技術開発はいつの時代にも同時であったことが、人間に他の動物にはない進化をもたらしてきた、ということ。

ニ 技術は人間をモデル化し可視化するので、それを生み出す人間自身のありかたを具体的に人間に教えてくれる唯一の手段である、ということ。

問二 空欄 A に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 相対 口 同一 ハ 実体 ニ 客観

問三 傍線部2「消去法的に人間を理解する方法でもある」とあるが、この説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人間の全体像を一挙に理解するのは困難であると知り、理解できた本質は既知のものとして遠ざけ、全体像獲得に向け粘り強くすすむ方法でもある、ということ。
- 口 人間の能力と本質とをはっきり区別し、技術によってモデル化できるのは能力として次々に除外し、最後に残るものこそ本質とみなす方法でもある、ということ。
- ハ 人間にとって技術で置き換えることが可能な能力は本質的ではないと考えて、人間の本質から除いて人間を理解してゆく方法でもある、ということ。
- ニ 人間は「人間とは何か」を問いつけることで自らを向上させる唯一の動物であり、モデル化による答えに満足せず前進する方法でもある、ということ。

問四 空欄 B に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 技術の進化によってのみ、人間社会から差別をなくすことが可能となる
- 口 生物としての人間のあり方は技術によって全面的に変更されつつある
- ハ 人間は進化とともに、「普通」という古い見方をなくしていく
- ニ 肉体は人間であること条件から外れかかっているのである

問五 空欄 C に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人間の期待を裏切つて勝手に発展する
- 口 人間の英知を超えて加速的に発展する
- ハ 人間の形態の模倣の枠内で発展する
- ニ 人間と開発競争を繰り返して発展する

問六 傍線部3「もしかしたら互いに愛するということは、そういうことかもしれない」とあるが、この説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人間にとって「愛」は、「心」「自我」等とともに意味が不明な言葉であり、人とアンドロイドの関わりによって意味の定義が可能になるかもしれない、ということ。
- 口 人間のプログラムした意図や欲求のもとにアンドロイドが動くのであれば、人間にはアンドロイドの「愛」の行為をうけとめるのは容易であるかもしれない、ということ。
- ハ 人間の意図や欲求を推定できるアンドロイドの登場は、現在は一方的になりがちな「愛」の関係を、双方向なものへと確実に変えてしまうかもしれない、ということ。
- ニ 人間には現在、アンドロイドとの愛など想像できないが、今の人間の間では成立し難い意図の共有が実現するならば、それを「愛」と呼んでいいかもしれない、ということ。

問七 この文章における筆者の考え方に合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 将来のロボット社会においては、人間が考えてもみななかった出来事がいくつも起きるだろうが、それに対応できる社会環境を人間はアンドロイドと協同で作りますようにしなければならぬ。
- 口 人間の進化の方法には、遺伝子によるものと技術の発展によるものと二つがあるが、生き残っていくという遺伝子に刻み込まれた使命は、どんなに技術が発展してもアンドロイドにプログラムすることはできないだろう。
- ハ コンピュータとロボット社会の到来によって人間の進化はまったく新たな段階を迎え、これまでの人間の位置をコンピュータとロボットにすべて譲り渡さねば人間は進化を続けられなくなってしまう。
- ニ 人間に進化をもたらしてきた技術が作りだすロボット社会において、人間はロボットを通して自らの本質に向き合うのだから、人間の真の進化とは人間そのものの本質的理解に到達することといえよう。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

例外小説とは何か？

例外小説は、言うまでもなく「例外」と「小説」の二つの語の接続で出来ている。小説という語の定義も一通りではないが、それは一旦置く。まずは例外である。例外とは何なのか？

たとえば「例外なく」という言い回しがある。その意味するところは要するに「何もかも全部」ということだ。だが「何もかも全部」と言わずに「例外なく」と言うときには、明らかに「例外」の存在可能性が暗黙に前提されつつ、にもかかわらずそれ（≡例外）はこの場合は無い、と言っているのである。「例外」は英語で exception。except は「～を除いて／＼以外」である。「例外なく」は without exception。むしろ「exception ≡ 例外」乃至「without exception ≡ 何もかも全部」を成立させているのではないかとも思えてくる。

「The exception proves the rule」という諺ことわざもある。例外は規則を証し立てる。逆にすると「The rule proves the exception」。規則は例外を証し立てる。規則と例外はワンセットなのである。掟破りが掟を、法律違反が法律の必要性を要請する。だがただ破るのや違反するだけでは例外とは言えない。法律の抜け道という言い方があがるが、この場合の「抜け道」が例外である。あるとき誰かが発見するまで、あるいはあるとき誰かが自らの手段によって開通させるまで、全く知られていなかった、すなわち無いと思われていたのだが、実は秘かに存在していた抜け道。それが存在したとわかった瞬間、Aはすぐさま崩壊する。実は「例外なく」ではなかったことがわかるのである。

では次に、ちよつと角度を変えて、空間的に考えてみる。集合論的に、と言ってもよい。全然むつかしい話ではない。例外とは或る集合の内部に含まれる外部である、と述べてみよう。内部に穿たれた外部ぶつ。本来はその集合に属していないはずなのに、何故だかその中に在る要素。朝の通勤ラッシュ時の女性専用車両に知らずに乗り込んでしまった私、これも集合論的な例外である。だが私が見事なまでに女装していたら、そしてそれが誰にもバレないレベルの変身ぶりであったならば？ 私わたしが例外であることを知っているのは私だけということになる。

おかしいな喩えを出してしまった。言いたいことは、或る集合の例外は素知らぬふりをして例外でないかのように振舞っていることもあり得る、ということである。そして、いつのまにか例外が紛れ込んでいることが露見したとして、すぐさま外に放り出される、ということもあるかもしれないが、そうはならず、むしろ集合の側が変化して、例外を特例として認める、とか、それは例外ではないということにする、となることだつて稀まれにはあれ起こり得る。だがそうなるまでは、確かにそれは、その集合に属する他のすべての要素が総じて持ち合わせている何らかの属性を持つていなかったり、その反対に他の全ての要素が持つていない何らかの属性を持つていたりする集合内のはぐれ者、すなわち例外、だったのだ。

ここで「例外小説」のもうひとつの項である「小説」を持ち出そう。「小説」における「例外」とは果たして何なのか？

これには色々な答え方がある。つまり「小説」のどのレイヤー注1に定位するかによって、そこでの「例外性」は違ってくる。もちろん第一に、最も根底的な層では、私たちが「小説」と呼んできた／呼んでいる営みと試み、それ自体の例外、ということになる。それはつまり「これは「小説」なのか？」と思わず疑って／問うてしまうような小説のことである。

と、こう書く②とお前の言う「例外」って要するに「前衛」の言い換えなんじゃないの、という声が聞こえてくる気もする。確かに両者には似ているところもある。しかし「前衛」が文字通り隊列の最前衛に位置して未踏の道を切り拓く者であるのに対し、必ずしも「例外」は先頭を進んでいるとは限らない。むしろ彼もしくは彼女は彼女は行列に紛れて何食わぬ顔で歩んでいることもある。横に居る誰かがふと彼女もしくは彼を見て、顔を前に戻そうとして不意に驚愕おどろきに打たれた表情になり二度見、という感じこそ、例外の面目躍如たるところである。

つまり例外は目立っているとは限らない。前衛であれば切り込み隊長とか尖兵せんぺいとか、やがて全体の役に立つやもしれぬ新たな何かをいち早く取り込んで後続へと受け渡す、みたいな役割が課されているわけだが、例外はそんなこともない。いや、あったとしてもそれはいわば結果論であり、しかもそういうことは実のところかなり稀であつて、例外は最後までただ例外のままであることの方がずっと多い。それゆえ例外は例外と呼ばれているのだ。

このことは、たとえば音楽やアートを例に取るとわかりやすい。たとえば耳を庄する爆音轟音とつせんだけが延々と続くノイ

ズ・ミュージックは紛れもない」a「である。演奏者が結局何ひとつじかないまま終わるジョン・ケージ(注2)作曲「4分33秒」(注3)も」b「における歴然とした「例外的存在」である。これらの試み／営みによって「音楽」は例外を内側に穿たれる／例外を抱え持つ。例外の出現と包含によって「音楽」はそれ以前とは多少とも異なるものに変質していくのだが、それはいわゆる進化とは呼べない。」c「の後に、ノイズの後に、全体的な趨勢すうせうとして「音楽」がそちらの方角に向かったわけでは全然ないからだ。

同じようにアートの世界においても、たとえばコンセプトチュアルなアート、言葉でしか存在しないアート、行為(の指示)としてのみ存在するアートといったものが六〇年代ぐらいからあちこちで多発して、結果的に「アート／芸術」と呼ばれ得るものの範疇はんちゆうを押し広げたのだとしても、それはあくまでも「例外」としての役回りに留まることになった。程なく皆が皆、そんなことばかりするようになる大変化の先駆けというわけではなかったのだ。

甲

それに自らが「例外」であることに全然気づいていない「例外」だって存在し得る。むしろ自分のやっていることはまったく問題なく「普通／原則／通例／一般」なのだというか、そんなことさえ考えもしない「例外」だって居るのである。つまり、意識的／無意識的にかかわらず、全体を見渡す視線からすれば「例外」としか呼びようのない小説群の系譜がある。

思いつくままに作家名を挙げてみるだけでも、そのリストは長く延びてゆく。様々な作家が同列に並べられることに異議を唱える向きもあろうが、それぞれの時と場所において「これは「小説」なのか？」という疑い／問いを少なからぬ人々に催させたであろうという点で、それらの名前は明らかに繋がっていると私は思う。

「小説」という語が百三十年ほどにわたって流通し、ごく自然に口にされ文字で書かれるようになって久しい現在、小説の例外性にも様々なヴァリエーションが生じている。そしてそのことの重要な一因は、日本(語)小説のいささか特殊なジャンル性にかかわっている。

日本の「小説」には多くの下位ジャンルがある。ジャンルのカテゴライズの仕方でも一様ではないが、とりあえずずらりと並べてみても、歴史小説、時代小説、青春小説、恋愛小説、冒険小説、政治小説、経済小説、官能小説、ミス터리、SF、ファンタジー、ホラー、純文学、ライトノベル、等々。中には同一次元で語ることの出来ないものもあるが、こうした名称群をひと纏めに「ジャンル小説」と呼んでおくことにしよう。なお、訝いぶかしむ読者も居るかもしれないので一応言い添えておくと、私は「純文学」も「ジャンル小説」の一種だと考えている。

「小説」という一個の巨大な集合の中に「ジャンル小説」という複数の部分集合(部分集合の部分集合や相互の重合も含む)が設定されると、「例外」も違った見方が可能になる。すなわち或るジャンル小説内の例外、ということである。そもそもジャンルとは、それ自身に内在的な属性というよりも、外から勝手に名指したり組み入れたりしている記号に過ぎないのだから、特定のジャンルに属しつつ属していない、というのは単に矛盾であるかにも思えるが、例外とはそのような矛盾的存在であるのだよという言い訳だけでなく、実際にそういうケースが散見されるのである。

「例外」の出現が「事件Ⅱ出来事」であるのなら、事件は不断に起こっている。無数の例外たちが存在する。巨大な例外もあれば、ごくささやかな例外もある。たとえこの先、小説が今とはまったく別の何かに変わってしまったとしても、例外はそのたび何処どこからか生まれてくるだろう。小説を破壊するため、終わらせるためではなく、それを復活させるため、また新たに始めるために、この世界のあらゆる事どものプロログとエピログのあいだに、例外たちは棲すんでいる。

(佐々木敦「例外小説論」による)

(注1) レイヤー：階層。

(注2) ジョン・ケージ：(一九二二～一九九二)アメリカの音楽家、作曲家、詩人、思想家。

(注3) 「4分33秒」：一九五二年にジョン・ケージが発表した無音の音楽。

問八 空欄 A に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ exception
- ロ without exception
- ハ The exception proves the rule.
- ニ The rule proves the exception.

問九 傍線部①「内部に穿たれた外部」とあるが、その例として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 朝の通勤ラッシュ時の女性専用車両に知らずに乗り込んでしまった私
- ロ 爆音轟音だけが延々と続くノイズ・ミュージック
- ハ 行為(の指示)としてのみ存在するアート
- ニ 外から勝手に名指したり組み入れたりしている記号

問十 傍線部②「お前の言う「例外」って要するに「前衛」の言い換えなんじゃないの」とあるが、筆者がそうではな

- いと考える理由として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。
- イ 前衛と違って、例外はつねに先頭を行くとは限らないから。
- ロ 前衛と違って、例外は目立つとは限らないから。
- ハ 前衛と違って、例外は最後までただ例外のままであることの方が多から。
- ニ 前衛と違って、例外は事件であり、不断に起こっているから。

問十一 空欄 a に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | |
|-----|-------|---|-------|---|-------|
| イ a | 音楽の例外 | b | 音楽／史 | c | 4分33秒 |
| ロ a | 音楽の例外 | b | 4分33秒 | c | 音楽／史 |
| ハ a | 音楽／史 | b | 音楽の例外 | c | 4分33秒 |
| ニ a | 音楽／史 | b | 4分33秒 | c | 音楽の例外 |
| ホ a | 4分33秒 | b | 音楽／史 | c | 音楽の例外 |
| ヘ a | 4分33秒 | b | 音楽の例外 | c | 音楽／史 |

問十二 傍線部 i ii のカタカナの部分と同じ漢字を含むものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

- i ヒかない
- イ 牽イン
- ロ ダン丸
- ハ タイ化
- ニ チユウ出
- ii 先ガけ
- イ ク除
- ロ ケン垂
- ハ ホン走
- ニ カ橋

問十三 空欄 甲 には次の四つの文が入る。正しい順序に並べ替えたとき、3番目にくる文はどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 古今東西、そのような真つ二つの反応を惹起することになった小説は数多く存在している。
- ロ もちろんそれには成功も失敗もあったが、成功と失敗をどうやって判断するのもよくわからないのが「例外」の「例外」たるゆえんである。

ハ 中には、どこまでいったら／どれだけやったら「小説」は「小説」でなくなるのか、というギリギリの際を敢えて狙って書くとした者だつて結構居る。

ニ 「これは「小説」なのか？」という疑い／問いは、「これも「小説」なのだ」という物わりの良さと「こんな小説」じゃない」という完膚なき否定の両極のあいだを揺れ動いている。

問十四 傍線部③「小説の例外性にも様々なヴァリエーションが生じている」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 次々に新たなジャンルの小説が生まれている。

ロ 今では、純文学もジャンル小説の一つと考えられている。

ハ 特定のジャンルに属さないような小説が現れている。

ニ 小説がこれまでとまったく別の何かに変わりつつある。

問十五 本文の論旨と一致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 例外のない規則はない。そして例外は集合内のどの部分集合にも属さない。そのような例外が集合を変化させることもある。

ロ 小説にも例外の系譜がある。それらは多様なヴァリエーションを見せながら、小説とは何かという問いを少なからぬ人に催させてきた。

ハ 例外小説は前衛と違って、文学を先導したり進化させたりすることはできない。しかし、どのジャンルにも属さないことが文学に革新をもたらしてきた。

ニ 例外の小説は、小説がどのように変化しても生まれてくる。それが小説を繰り返し復活させ、新しく始めることにつながっている。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

周の穆王の時、絶地・翻羽・奔霄・超影・踰輝・超光・騰霧・挾翼とて、八正の天馬來たり。穆王これに乗つて四荒八極を巡らざるといふ処なし。ある時西天十万里の山川を一時に越えて、中天竺の舍衛國に至り給ふ時に、釈尊靈山會上にして法花を説き給ふ。穆王馬より下りて会座に臨み、仏を礼し還つて、一面に座し給ふ。仏問ひて曰く、汝は何れの國の人ぞ。穆王答へて曰く、吾はこれ震旦國の王なりと。如來重ねて問うて云く、善きや、今この会場に來たる事、我國を治むる法あり。汝受持せんと欲するや否や。願はくは信受奉行して理民安國の功德を施さんと。その時世尊、漢語を以て四要品の中の八句の偈を穆王に授けおはします。今この法花の中に経律の法門ありといふ。深秘の文はこれなるべし。

その後穆王、震旦に歸つて、深く心底に秘して世に伝へ給はず。ある時、この帝寵愛せられける慈童、常に君の傍らに侍りけるが、君の空位を過ぐるとて、誤つて帝の御枕を越えたり。群臣これを見て、議奏しける。その例を考ふるに、罪科はなはだ浅からず。しかうして事誤りより出たれば死罪の一等を宥めて、遠流に処せらるべしとぞ申しける。群議止む事を得ざりしかば、つひにかの慈童を酈県といふ所へぞ流されける。かの配所と申すは、帝城を去ること三百里、山深くして、鳥だにも鳴かず、雲暝々として虎狼の栖なり。されば仮にもこの山に入る物、再び帰る事を聞かず。されば、穆王慈童を憐れみ思し召しければ、かの八句の中に普門品に當る二句の偈を潜かに授けまして、毎朝十方を一礼して、この文を一返唱へよとぞ仰せ含められける。

かの慈童、つひに酈県に流されて、深山幽谷の底に捨てられけり。悲しみながら君の恩命に任せて、慈童に授けられし二句の偈を、毎朝一返誦へけるが、もし忘るる事もやと思ひて、辺りなる菊の下葉にこの文をぞ書き付けたりける。その後より、この菊の葉に置ける露わづかに落ちて、流るる水、皆天の甘露の靈葉とぞなりにける。慈童渴に臨んでこれを飲むに、水の味はなはだ甘くして、百味の珍に過ぎたり。しかのみならず、天人花を撃つて來たり。鬼神手を束ねて奉仕しける間、あへて虎狼惡獸の恐れなくして、かへつて換骨羽化の仙人となりにけり。これのみならず、この谷水の末を汲んで呑みける民、三百余家、皆病速やかに消滅して、不老不死の上寿を保てり。

その儘時代推し遷つて、八百余年まで、かの慈童はなほ少年の貌にて衰老の粧なかりけるこそ不思議なれ。かくて歲月を経し程に、魏の文帝の時、召し出されて、彭祖と名を改むる時、この偈を以て文帝に授け奉る。帝これを受持して、菊花の盃を伝へて、万年の寿を賀します。今、甲といふはこれなるべし。

〔太平記〕による

(注) 周：中国の古代王朝名。

絶地：以下は天馬の名。

四荒八極：世界のすみずみまで。

中天竺：インド中部。

釈尊：釈迦如来。仏陀。

靈山：靈鷲山。

法花：『法華經』。

四要品：『法華經』の中の重要な四つの章。

偈：經典中の韻文。

普門品：『法華經』の章名。観音菩薩の功德を説く。

魏の文帝：曹丕（一八七～二二六）。

問十六 傍線部B「君の空位を過ぐるとて、誤つて帝の御枕を越えたり。」の意味として最も適切なものを次の中から

一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 帝が退位して傍らを通過したとき、誤つて帝の枕をまたいでしまった。
- ロ 帝が退位して傍らを通過したとき、誤つて帝の枕を持ち上げてしまった。
- ハ 帝が天馬で天竺に飛び去ったとき、誤つて帝の枕をまたいでしまった。
- ニ 帝が天馬で天竺に飛び去ったとき、誤つて帝の枕を持ち上げてしまった。
- ホ 帝が居られない玉座を通ったとき、誤つて帝の枕をまたいでしまった。
- ヘ 帝が居られない玉座を通ったとき、誤つて帝の枕を持ち上げてしまった。

問十七 二重傍線部 a、c の主語にあたる人物はだれか。それぞれ最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 天馬 口 穆王 ハ 釈尊 ニ 慈童 ホ 群臣 ヘ 文帝

問十八 波線部 i、3 の「べし」と、波線部 i、iv の「らる（られ）」には、それぞれ一つずつほかと意味の異なるものが含まれている。その組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 1 と ii 口 1 と iv ハ 2 と i ニ 2 と iii ホ 3 と iii ヘ 3 と iv

問十九 空欄

甲

に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 元旦の宴 口 曲水の宴 ハ 端午の宴 ニ 七夕の宴 ホ 重陽の宴 ヘ 五節の宴

問二十 傍線部 A は、唐の詩人白居易の新樂府「八駿図」の一句である「四荒八極踏欲遍」を踏まえた表現である。しかしこの作品においては、穆王は天竺ではなく、崑崙山に住む神女である西王母を訪ねて行くという設定となっている。穆王が仙界で遊興を尽くしたため、王に残された天下万民は愁いに沈み、世が乱れたという。以下の漢文は、この樂府の後半部分にあたる。これを読んで、あとの(1)、(3)の問いに答えよ(返り点、送り仮名を省いた部分がある)。

周^ハ 從^ニ 后^リ 穆^ニ 至^{ルマテ} 文^ニ 武^ニ 積^ミ 德^ヲ 累^レ 功^ヲ 世^ニ 勤^ク 苦^ス 豈^ニ 知^{ランヤ} 纒^{ワツカニ} 及^ニ 五^ニ 代^ノ 孫^ニ 心^ニ 輕^ク 王^ノ 業^ヲ 如^ク 灰^ノ 土^ノ 由^レ 来^ル 尤^ハ 物^ハ 不^レ 在^ラ 大^ニ 能^ク 蕩^ラ 君^ノ 心^ヲ 則^チ 為^ス 害^ヲ 文^ノ 帝^ノ 却^レ 之^ヲ 不^ニ 肯^{ヘテ} 乘^ラ 千^ノ 里^ノ 馬^ヲ 去^{リテ} 漢^ノ 道^ヲ 興^ル 穆^ノ 王^ノ 得^テ 之^ヲ 不^レ 為^レ 戒^ト 八^ノ 駿^ノ 駒^ヲ 来^{リテ} 周^ノ 室^ヲ 壞^ル 至^{リテ} 今^ニ 此^ノ 物^ヲ 世^ニ 称^ス 珍^ト 不^レ 知^{ルヤ} 房^ノ 星^ノ 之^ヲ 精^ク 下^{リテ} 為^レ 怪^ト 八^ノ 駿^ノ 図^ヲ 君^ノ 莫^ク 愛^ス

(注) 后穆：伝説上の周王朝の始祖名。 文・武：文王・武王。 尤物：すぐれて珍しいもの。

文帝：漢の文帝。 劉桓（前二〇三〜前一五七）。 房星：二十八宿の東方第四宿。 そいほし。

(1) 傍線部 C 「心軽王業如灰土」の訓読として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 心に軽んずる王業は灰土に如かざるを
口 心の灰土の如きは王業を軽んずるを
ハ 心に王業を軽んずること灰土の如きを
ニ 心の軽き王業は灰土の如くなることを
ホ 心に王を軽んじて業は灰土の如くならんことを
ヘ 心を軽んずる王は業を灰土の如くするを

(2) 傍線部 D 「八駿図君莫愛」と、この樂府の最後に白居易はどうして詠じたのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 穆王が八頭の天馬で仙界を巡幸したことにより、周王室が減んだことを戒めている。
口 天空を駆ける穆王の愛馬の絵が、唐代に行方不明になったことを残念に思っている。
ハ 五代を経た子孫たちには、穆王の愛情がもはや及ばなくなったことを皮肉っている。
ニ 穆王が愛した八頭の駿馬の故事を描いた屏風を、数多く転写することを勧めている。
ホ 房星の精が地上に降りて怪異をなしたため、駿馬の価値が下がることを嘆いている。
ヘ 周王朝の事績を顕彰する八駿図が、唐代には不吉なものとされたことを笑っている。

(3) 白居易の作品として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 論語 口 楚辞 ハ 文選 ニ 長恨歌 ホ 西遊記 ヘ 狂人日記

問二十一 問題文『太平記』と白居易「八駿図」に関する次の記述のうち、内容と合致するものとして最も適切なものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 周の穆王は、八頭の天馬に乗り世界中のあらゆる地域を巡回したが、唯一天竺だけは行くことができなかった。

口 天竺の靈鷲山において『法華経』を説法していた釈尊は、周の穆王に対してその経典に基づく深秘の文を授けた。

ハ 周の穆王は、寵愛していた慈童の罪が深かったため、死罪を強く主張したが、周囲の説得により遺流と決まった。

ニ 慈童は、酈県において、穆王に授けられた傷文を菊の葉に書いたところ、虎狼や天人・鬼神に誦誦を妨害された。

ホ 周王朝は、后稷から武王に至る間、徳を重ねず苦勞ばかりしていたので、遊蕩の穆王の出現をみることになった。

ヘ 漢の文帝は、千里馬の献上をしりぞけて乗ることはなかったため、漢王朝の政道が大いに興隆することになった。

〔以下余白〕